

編集後記

2020年は、国勢調査100周年、国勢調査人口減少10周年、さらには日本で歴史人口学が誕生してほぼ50年にあたる。2020年6月に小島宏・日本人口学会会長から、これを機に、より広い視点と方法論から歴史人口学の成果と課題を俯瞰する報告書を作成してはどうかとの示唆をいただき、研究企画委員会を組織して、2020年夏から「歴史人口学の課題と展望」というテーマのもとに報告書の構成案の検討を始めた。

報告書『歴史人口学の課題と展望』は、2000年から2020年までの歴史人口学の新展開について展望することを目的とした。本報告書では、第1部：歴史人口学の新たな展開と成果、第2部：人口学全般への貢献／新しい研究方法の歴史人口への適用、第3部：人口からみた社会経済の理解／新たな歴史像・民衆像・地域像の提案、第4部：今後の展開への期待・課題の4部に分けて展望する計画であった。第3部の展望論文は、A) 2000年から2020年の研究動向を踏まえて、獲得された知見、資料やデータを整理しつつ、新しい事例、展望を加えた論文、B) トピックに関する先行研究と最新研究成果をまとめた論文のいずれのスタイルも受け入れることとした。コロナ禍により、第1部から第3部の展望論文を踏まえた研究会を開催することができなかつたため、第4部は割愛した。原稿提出期限から入稿まで1カ月という厳しい時間的制限下での編集作業となるため、研究企画委員会は、査読を行わず、スタイルチェックに止めるという方針を理事会で御承諾いただいた。

25章から構成される報告書『歴史人口学の課題と展望』が、2022年6月11・12日の日本人口学会第74回大会（於、神戸大学）前に日本人口学会公式webサイトから公開できたのは、25人におよぶ執筆者各位の御尽力と、小島宏会長、中澤港広報委員長、岩澤美帆総務委員長はじめ、理事各位の御支援の賜物である。改めて感謝の気持ちを表したい。

執筆依頼から10カ月という短時日のうちに、本報告書が完成したのは、執筆者の多くが、速水融教授を研究代表者とする科学研究費補助金（創成的基礎研究）「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」（略称EAPプロジェクト、1995年度から1999年度）の参加者であったことによる。EAPは、新設間もない国際日本文化研究センターを研究拠点とする人文社会科学分野で当時最大の予算がついた国際共同研究であった。速水先生に率いられたチームは、熱気に包まれていた。EAPで培われた国籍や専門分野を超えた研究交流が続いており、過去の人口・家族研究に関する核の一つとなっている。EAP終了後の20年間にわたる歴史人口学の成果と課題を展望することを意図した本報告書の企画に対しても、旧メンバーから御賛同いただき、厳しい時間的制限の下で完成することができた。

一方、執筆者には、EAP終了後に研究生生活に入った世代が2割を占める。この20年間に、18・19世紀の日本を対象とした人口・家族研究を主題として学位論文を書く内外の大学院生が続いていることも、人文社会科学分野では特筆すべきであろう。次世代の歴史人口学を担う萌芽は着実に育っている。

本報告書は、日本で歴史人口学が芽生えて半世紀のマイル・ポストである。本報告書が、今後の歴史人口学への期待と課題について議論する契機となれば幸いである。

日本人口学会研究企画委員会（2020～2021年度）